奈良大学博物館所蔵の高野版小型板木

－小型板木の構造と再利用方法について－

青　　木　　麻 佑 花*

Kouya Buddhist Printing Small Blocks in the Nara University Museum

－The Structure of the small block and Way of Reuse－

Mayuka AOKI

要　　旨

板木は、文化と宗教の発展及び流布に寄与するだけでなく、商業や印刷業界等も進展させてきた。板木に関する既往の研究では、主として、板木によって生産された版本が研究対象となってきた。そのため、奈良大学博物館所蔵の高野版板木に含まれる資料のうち、所蔵登録が「高野版スタンプ」とされるものから、前稿（青木2017）で捺印式はスタンプ型板木、摺写式を小型板木と定義した。

この前稿をもとに、本研究は小型板木の中から釘の加工痕が確認できる８点に焦点を当て、資料の詳細な検討を行なった。検討方法は、法量と重量の調査、そしてＸ線透過撮影の分析を行った。この結果により、高野版小型板木の釘に関する加工痕から3つ、再利用方法は４つの分類が可能となった。今後、技術の発達段階や分業体制をはじめとする工房組織の在り方など多角的な検討が望まれる。

キーワード：高野版、仏教板木、奈良大学博物館

Ⅰ　はじめに

奈良大学博物館に所蔵されている高野版板木は約500点、その中の約120点が小型板木及びスタンプ型板木である。金子貴明（2013）は「ほとんどは江戸時代の板木と思われ、かつて高野山の山上に存在していた板木が、ある段階で山外へ出たものと考えられる。まだ筆者の調査は十分とはいえないが、概要のみを記せば、経典・講式・法則・悉曇（声明）関係、伝記、図像など、内容は多岐にわたっている」とし、前稿（青木2017）では高野版板木について「鎌倉時代にはじまり、断続的に江戸末期に及ぶ」とし、また「大半は鎌倉時代の開板であるが、江戸時代初期まで断続的に印刷された」ことから筆者は、元来、高野山上にあった板木が、おそらく第二次世界大戦後しばらく経過してから、古書籍商を経由して奈良大学博物館に収蔵された[1)]と推測した。

板木とは、文字や図様を彫刻した木の板のことで、文化或いは芸術の情報発信の一つの方法として書籍や絵図等の制作に用いられた木版印刷を示す。現代のような情報発信の方法が進展して

平成30年９月19日受理　*文学研究科文化財史料学専攻博士前期課程　修了生

いない時代では、いかにして大人数に迅速な情報伝達が行えるかが重要とされ、その有効な手段として版本及び板木があり、僧侶や幕府等の所有者により監視と管理が行われた。使用した目的は第一に宗教があり、その一例としては奈良時代の印刷物と推測されている無垢浄光経（百万塔陀羅尼）を挙げる。ほかにも政治や教育の教本、そして娯楽及び文化並びに扇情的な知識を共有するための方法として機能した。

本研究では高野版板木に含まれる資料のうち、釘の加工痕が確認できる８点の小型板木に着目して詳細な分析を行ない、その構造及び再利用方法を検討することを目的とする。本稿においては、前稿の資料調査を行った結果を踏まえ、新たにＸ線透過撮影の分析結果を報告する。

なお、奈良大学博物館の板木の殆どは、立命館アート・リサーチセンターとの共同研究によりデータベース化され、インターネットを通じて図版の閲覧が可能である。

そのため、掲載画像、奈良大学博物館および図書館所蔵板木の画像に関しては「板木ポータルデータベース」（http://www.arc.ritsumei.ac.jp/database.html）で検索されたい。

Ⅱ　高野版小型板木研究の意義について

日本最古の木版印刷は称徳天皇（764年）が発願し、法隆寺に無垢浄光経（百万塔陀羅尼）を奉納したものとされているが、その後は平安時代中期まで木版印刷と思わしきものは存在しない。平安時代初期までは貴族の間で行われる写経が一般的であったが、中期になると一般人が行った写経も出現する。さらに、摺供養や摺経供養については、経典の大量制作及び短時間が可能になったことにより隆盛を極めた。この摺供養や摺経供養のように、既往の板木研究とは版本が主な研究対象であり、板木自体を研究対象としていなかった。原型を留めている資料は極めて稀で、その要因の１つとしては利用するごとに減少していく使用方法や、貴重な木材を使用していたことも関係している。そのため、必ずしも板木自体が美術工芸品としての価値が高いとは言えず、産業品として扱われることが多く、新たな資料が発見されることは少ない。

このような、小型板木やスタンプ型板木或いは仏教版画研究をとりまく背景から、奈良大学博物館所蔵の高野版板木も十分には研究されてこなかった。しかし、小型板木やスタンプ型板木からはまだ特定されていない加工痕が残されており、その加工痕から技術の発達段階や分業体制をはじめとする工房組織の在り方、または板木の再利用の方法といった様々な研究に寄与できる可能性が含まれる。これらの研究は、社会の歴史的過程を明らかにするために重要であるとともに、仏教版画では技術の変遷から仏教を中心とした信仰の在り方や時代ごとの信仰形態の移行を推測し得る。

Ⅲ　小型板木の制作方法について

板木は、様々な表記をされるが全て同じものであり、板木制作の職人を彫師、板木師と呼び、板木を摺る職人を摺師、板摺、はんずり工[2)]と呼ぶ。そのため、本研究における小型板木でも同様に呼ぶこととする。

高野版板木を使用方法上、（A）捺印式（B）摺写式の二つに大別[1]した。まず、（A）はスタンプ型板木であり、手に持って墨をつけてから紙に印捺する使用方法で、現代の印鑑と同様に、限られた場所でも印捺が可能のため、機能性に富んでいることが特色である。一方、（B）は小型板木であり、板木に墨をつけてからその上に紙を置いて摺写するもので、現代でも多くの人が思い浮かぶ板木と同様の使用方法である。さらに、使用用途は経典板木や護符板木と言った宗教に関するものと、浮世絵板木等の文化に関するものに大別できる。なお、スタンプ型板木を板木としない研究者も存在する。だが、前項で述べたように板木とは、文字や図様を彫刻した木の板のことであり、文化や芸術の情報発信方法の一つとして書籍や絵図等の制作に用いられた木版印刷のことを示す。よって、本研究はスタンプ型板木を板木の１つと位置付け、捺印式はスタンプ型板木、摺写式を小型板木と定義した。

Ⅳ　高野版小型板木の資料調査及び分析

奈良大学博物館の所蔵登録名が「高野版スタンプ（Kstamp）」63点あり、その中から釘の加工痕が確認できる８点について資料調査を2017年８月下旬から９月中旬に亘って行い、さらに分析を行った（表１、図１-３）。高野山関係の板木には、高野山で使用されたと考えられるものと、

図１　奈良大学での法量・重量調査

図２　奈良大学でのＸ線透過撮影作業

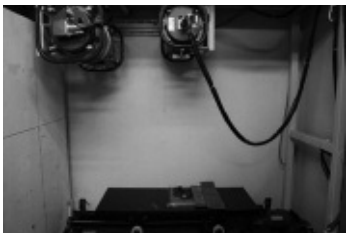


図３　奈良大学のＸ線透過撮影装置

表１　法量・重量

板木No.	新名称	右端（㎜）	厚さ（㎜）	横寸（㎜）	縦寸（㎜）	重量（ｇ）	銘文（改行は/で表す）
Kstamp037	九重守	18.7	24.2	28.3	95.5	40.0	九重守
Kstamp041	一行阿闍梨出行最記	27.8	30.3	135.0	119.0	228.0	世に山一行阿闍梨で出行に最記肖て/事越不知誤て悪日がおこない旅他國にて/危程に進事まで肖て仍る今彩に/て開板世に弘者也/南紀高野山/「一行阿闍梨出行最記」/經師久五郎
Kstamp083	月牌支證	11.3	18.6	80.3	165.0	136.0	高野山/月牌支證　大樂院/檀主
Kstamp092	熊谷寺	17.7	16.1	104.7	145.0	137.0	高野山　熊谷寺
Kstamp093	經かたびら	18.4	18.0	135.0	255.0	437.0	經かたびら
Kstamp096	月牌之證文	11.6	22.7	61.1	298.0	184.0	高野山/月牌之證文　三寶院/施主
Kstamp097	護摩供	17.0	22.8	49.7	261.0	163.0	梵文/高野山/奉修護摩供害虫滅除五穀成就祈攸/龍城院
Kstamp103	日牌之契證	10.6	18.3	88.0	315.0	311.0	高野山小坂坊/日牌之契證　持明院/功徳主

高野山に関係する寺院で使用されたものの両方を含むが、本調査では前者の板木について行う。

そして、分析方法としては非接触非破壊で詳細に内部観察を観察できるＸ線透過撮影を用い、加工痕から構造と再利用方法について検討を行なう（図３）。

その結果、本体と別木の間に釘があることが判明した。さらに、本体と別木の間にある釘の頭を切断した後、入れ木を施して上から釘で固定するなどの構造が明らかになった。

（１）高野版小型板木（Kstamp037）

目視調査の時点で入れ木があると判明していたが、さらに詳しく小型板木と板木の相違点を確認するためにＸ線透過撮影を行った（図４）。

入れ木は、板木や小型板木を半永久的に使用するために施された技法をいい、主として、寺院名や僧侶の名前またはお守り等の名称が変更した際に使用する（図５）。図５の１のように、新たな名称を彫刻した木と入れ替えるものである。また、板木や小型板木を制作した後に入れ木を施すものと、入れ木を施すことを前提に制作したものが存在し、前者は古い時代のもので後者は

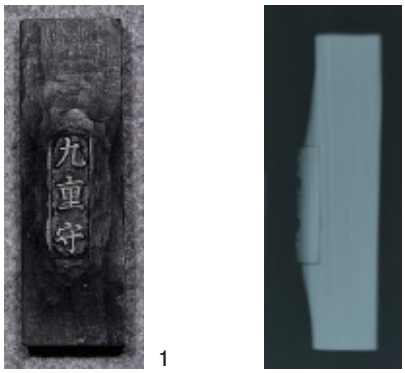


図４　高野版小型板木（Kstamp037）　1.写真　2.Ｘ線透過撮影画像

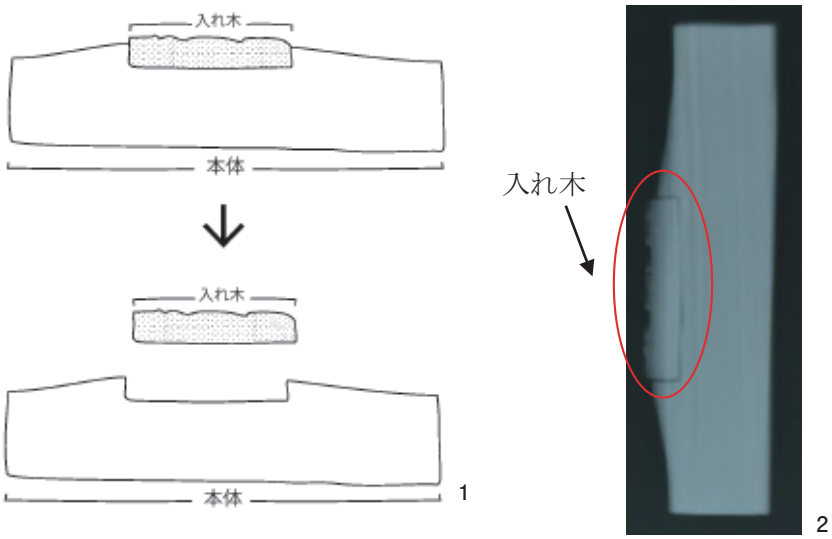


図５　入れ木　1. 図解　2. X線透過撮影画像の入れ木部分

新しい時代のものであると推測し得る。なぜなら、法隆寺に無垢浄光経（百万塔陀羅尼）を奉納した木版印刷があることから、板木からスタンプ型と小型板木に派生したと言えるためである。

この小型板木には「九重守」の刻字があり、九重守とは江戸時代以降に流布したとされ、六十六部の御守や道中安全の守護牘として浸透した。奈良県で開板されたものであり、一種のお守りとされており密教で信仰される諸仏や真言の種子を記したもの[3]とある。図４の２に確認できる入れ木及び本体の木目は、両方とも類似していることから他のお守り等と入れ替えて使用していたと推測し得る。

（２）高野版小型板木（Kstamp041）

入れ木を施しているのは目視調査により確認できており、別木から本体に向けて打ち込んだ釘は、入れ木を固定する役割を果たしていると仮定してＸ線透過撮影を行なった（図６）。しかし、図６の３からは入れ木の部分に釘が打たれていないことから、入れ木による継続的な使用を可能にするため、枠の形になるように別木を釘で固定したと言える。さらに、下部に半円形の穴をあけた別木を取り付けることによって、捺印式の機能を果たし、その役割は、半円形の穴に親指を入れることで安定した捺印が可能になったと考えるためである。

そして、Ｘ線透過撮影を行った側面の画像から、別木を固定するために本体の３分の２まで釘

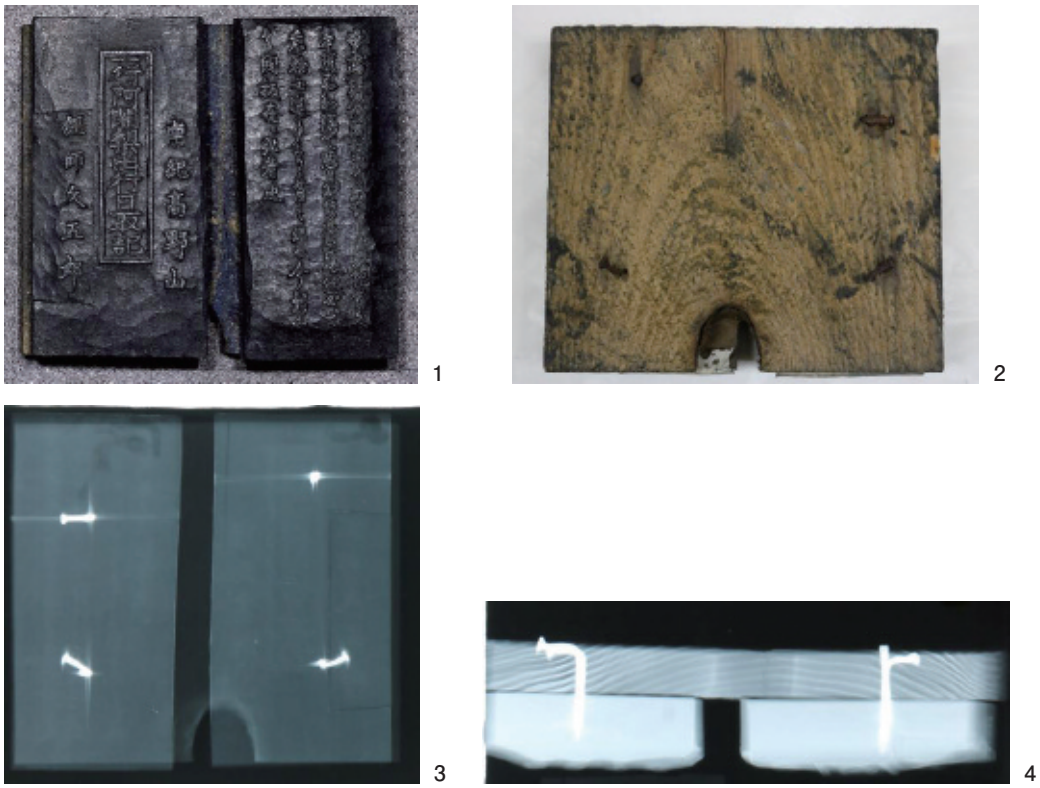
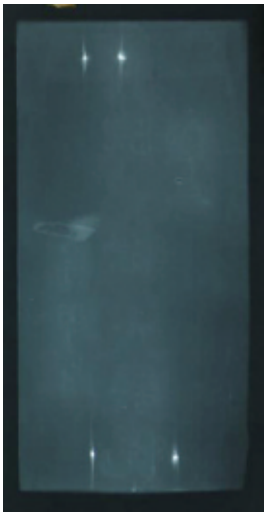


図６　高野版小型板木（Kstamp041）
1. 正面写真　2. 裏面写真　3. Ｘ線透過撮影正面画像　4. Ｘ線透過撮影側面画像

が打たれていることが判明した。この釘は端の４か所に打ち込まれ、本体と別木同士を固定するためのものと考えられるが、その内の３本は別木から出ている釘の胴部を折り曲げており、さらに１本だけは頭部が切断されている。この頭部を切断した理由は定かではないため、今後、頭部の切断と折り曲げる加工を課題とする。また、本体と別木を確認すると、Ｘ線透過の密度や木目が異なることから本体と別木は違う木材を使用した可能性を示唆する。

（３）高野版小型板木（Kstamp083）

図７から背面の上部に和紙が確認でき、その上から２本の釘によって和紙と小型板木を留めており、下部にも垂直に打った釘痕がある（図７の３）。その釘跡の左右には、斜めから打った釘痕も存在することから、上部と同様、和紙とともに固定するために釘を垂直に打ち込んだと判断できるため、別木を固定するための釘痕と推測し得る。さらに、図13の高野版小型板木（Kstamp103）の背面から、細い別木と和紙を釘で留めていることが分かるため、高野版小型板木（Kstamp083）も高野版小型板木（Kstamp103）と同様の加工が施されていたと言える。


1

2

3

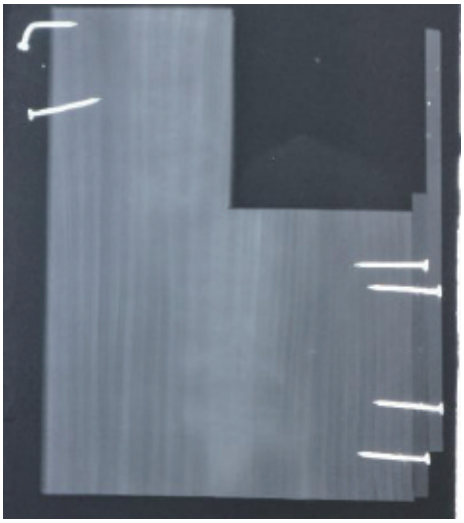
図７　高野版小型板木（Kstamp083）　1. Ｘ線透過撮影画像　2. 正面写真　3. 裏面写真

（４）高野版小型板木（Kstamp092）

特徴が２つあり、１つ目は２枚の別木を側面から釘で留めていおり、木目同士が類似していること、次に、別木の１枚目は釘を打った後に２枚目の釘を打ち込んでいる点である。これらの加工は、故意的に１枚目と２枚目の間をあけて留めている（図８）。

さらに、片面しか別木と釘は現存していないが、本来はもう片面にも別木が存在していたと考える。また、入れ木の加工痕があることからも高野版小型板木（Kstamp093）と同様、入れ木を固定するために両方の側面には釘と別木が存在したと言える（図９の３）。したがって、上部に入れ木のための加工痕があり（図８の２）、前提として入れ木を行うように制作していないため再利用された小型板木と言える。

1



2

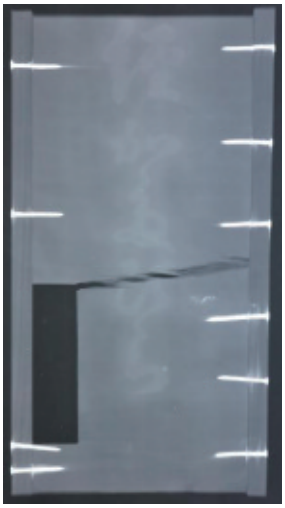
図８　高野版小型板木（Kstamp092）　1. 写真　2. Ｘ線透過撮影画像

（５）高野版小型板木（Kstamp093）

高野版小型板木（Kstamp092）と同様の型式をしており、左右の側面から釘で別木と本体を留め（図９）、右側面の下部にある釘が入れ木を避けて打たれていることから（図９の２）、再利用された小型板木と言える。なぜなら、入れ木を前提に小型板木を制作している場合、側面の別木は必要なく、さらに、図９の２を確認すると和紙が付いていた痕跡があることも特徴の１つである。

1

2



3

図９　高野版小型板木（Kstamp093）　1-2. 写真　3. Ｘ線透過撮影画像

（６）高野版小型板木（Kstamp096）

本体と別木を確認すると、Ｘ線透過の密度や木目が異なることから高野版小型板木（Kstamp041）と同様に、高野版小型板木（Kstamp096）は本体と別木の木材が違う可能性がある（図10の２）。しかし、高野版小型板木（Kstamp041）と異なる点は釘の頭を折り曲げていないことだが、厚みは高野版小型板木（Kstamp041）の方がある（図10）。このことから、釘の頭部を折り曲げることと厚みは関係性がないと言える。そして、高野版小型板木（Kstamp041）と高野版小型板木（Kstamp096）の使用用途が異なるため、釘の頭部を折り曲げる加工がされたと言える。

1　2

図10　高野版小型板木（Kstamp096）
1. 写真　2. Ｘ線透過撮影画像透過撮影側面画像

1　2　3

図11　高野版小型板木（Kstamp097）
1. 写真　2. Ｘ線透過撮影正面画像
3. Ｘ線透過撮影側面画像

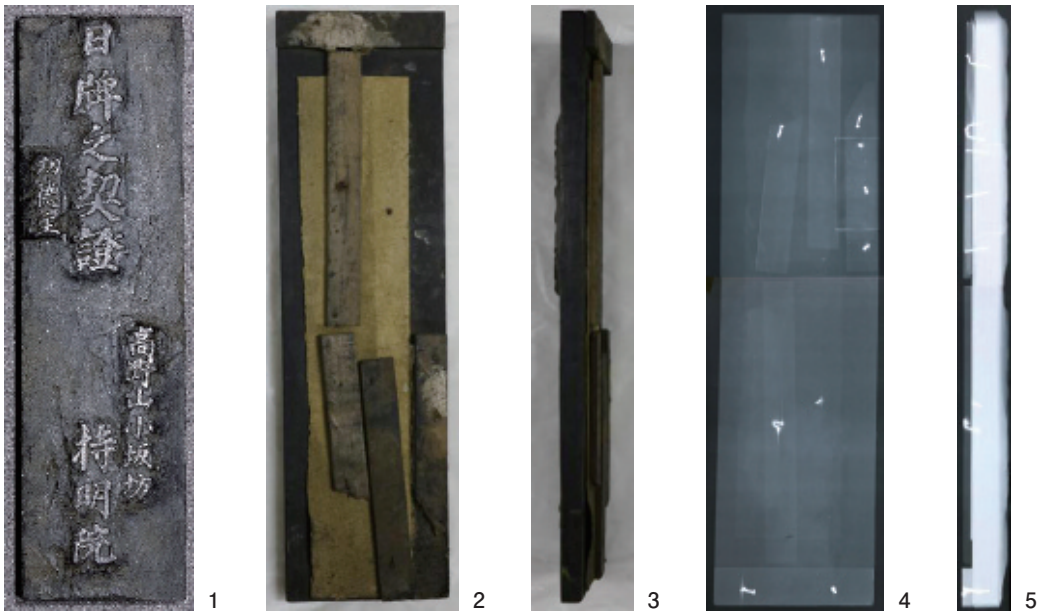
（７）高野版小型板木（Kstamp097）

「龍城院」の彫刻がある入れ木の下部に１本だけ釘が存在し、その他にも「護摩供」と「高野山」の彫刻がある間にも釘は確認できるが、この釘は小型板木の劣化により補修として打たれたものである（図11）。また、「高野山」の彫刻の上部に１本の釘を打ち込んでいるが、「龍城院」の彫刻がある上下には２本の釘がある。しかし、背面には和紙が何重にも重なっていることから、この釘は和紙を留めるために打ち込んだものではないと判明した。和紙については加工された当時のもので、読まなくなったものを再利用として使用している。さらに、１本だけ斜めに釘を打ち込んでいるが、これも釘は和紙の部分まで到着していないことが確認できた。

（８）高野版小型板木（Kstamp103）

背面に別木と和紙が存在することは目視観察で判明できたが、ほかの小型板木でも確認できた

和紙との間に釘が打ち込んでいると仮定してＸ線透過撮影を行なったが、和紙との間に釘は見受けられなかったが（図12）、背面に４枚の細い別木が釘で留めている点は特異である。さらに、小型板木の上部に別木を釘で固定し、下部の切断面が粗いことから別木が存在していたと言える。



1　2　3　4　5

図12　高野版小型板木（Kstamp103）　1-3. 写真、4-5. Ｘ線透過撮影画像

Ⅴ　考　　察

現在でも木版印刷は少数だが行われており、世界からも注目を浴びるとともに高評価を得ているが、Ⅱ章でも述べたとおり、版本や印刷物は好評価を得ているため研究は進歩している。しかし、多くは板木自体の研究ではないため、高野版板木における職人の技術や利用方法の研究は進展していない。そのため、スタンプ型および小型板木の表面情報と内部構造から使用方法や再利用の具体的な方法が判明すると推測し得る。また、多くの表面と内部の情報を蓄積することにより技術集団や製造時期、そして両者の関係性を解明できる可能性がある。両者の関係性を解明することで研究者だけでなく、現代の技術者と情報共有することにより技術の復元、または現代の板木における印刷技術の向上にも貢献することができると考える。

小型板木やスタンプ型板木は、内部構造や使用木材の木目及び材質等といった様々な疑問点がある。Ｘ線透過撮影は文化財の内部情報を得るために使用されており数多くの研究実績を残しているが、一方向からの撮影しかできないため立体的な透過撮影は不可能であるとともに、資料の大きさと撮影の角度についても制約がある。このことから、内部構造に関して二次元画像の観察でしか行うことができず、前後が重なった画像や角度の制限があった画像からは内部構造を完全に把握することが困難であった。そのため、高野版小型板木（Kstamp097）と高野版小型板木（Kstamp103）の撮影は断念する結果となった。しかし、小型板木においてＸ線透過撮影を使用

した内部構造の観察を行っている研究事例がないため本研究は重要であると言える。

また、Ⅱ章でも述べたが国文学や美術史、印刷及び情報関係の研究分野において高野版の版本は重要な研究対象とされてきた。だが、文化財の研究分野では小型板木に対して研究価値があると論じられていないため、本研究により高野版板木や小型板木自体が研究対象として価値があると言える。

Ⅳ章の分析から以下のとおり、小型板木について釘の加工痕は３つ、再利用方法は４つに分類できる。

（１）釘に関する分類

甲）側面から施されているもの

乙）背面（裏面）から施されているもの

丁）正面（表面）から施されているもの

（２）再利用方法の分類

Ａ）側面に別木があるもの

Ｂ）入れ木があるもの・入れ木の加工痕があるもの

Ｃ）背面（裏面）に別木があるもの

Ｄ）和紙が背面（裏面）にあるもの

内田啓一（2011）は、「技術面が異なることから制作目的・信仰形態が異なることが考えられる」と論じていることからも、今後の研究は制作時期についても注目し、制作目的や信仰形態の検討が必要である。さらに、和紙の利用方法はスタンプ型（捺印式）にする際、滑り止めの役割があったと考えるが、推測の域を超えないことから研究を続ける必要があるとともに、その他には小型板木と和紙の関係性も今後の課題として挙げる。

Ⅵ　おわりに

奈良大学博物館が所蔵している高野版小型板木のうち、釘による加工痕が確認できる８点に着目して詳細な分析を行なった。前稿（青木2017）では、高野版小型板木とスタンプ型板木に関する基礎的研究を行ない、彫字判読、法量と重量の調査、縦横比及び厚さと右端等を分析し、その結果から型式分類が可能となった。この前稿をもとに、本研究は新たな高野版小型板木に関する構造と再利用方法について述べた。

広義の高野版板木に関しての研究は初期段階であると言える。書誌学的には狭義の高野版の影響下にあるはずであるが、むろんその影響が及んだのは大覚寺と智積院だけであったはずはなく、市井の板元の出版物も合わせて、今後はより広範な視野で臨まねばならない[4]ため、高野版板木の研究を進めることとともに、スタンプ型や小型板木の研究についても促進していく必要がある。

今後の展望としては、本調査において資料の大きさや撮影の角度で制約が生じた高野版小型板木（Kstamp097）と高野版小型板木（Kstamp103）を引き続き、分析科学の手法である三次元デジタイザ及びＸ線ＣＴスキャナ等による内部構造の調査で行う。また、小型板木及びスタンプ型板木の樹種同定、並びに赤外線画像による文字解読や情報工学的手法を用いて研究を進めていく。

そして、各結果から高野版小型板木及びスタンプ型板木に関する新たな編年や型式を示すことができると考え、これにより技術の発達段階や機能性、寺院の動向及び庶民の信仰といった仏教信仰と神道信仰形態の変化を推測し得る。他には江戸時代以前の寺院における経典や仏書の刊行、印仏と摺仏の制作などの研究に寄与できる可能性が含まれる。

謝　辞

調査研究と本稿の作成にあたり、適宜ご指導いただきました、坂井秀弥教授（奈良大学）及び今津節生教授（奈良大学）に深く感謝の意を表します。高野山について懇親なご指導をいただきました、長嶋公円大僧都（高野山）に深く感謝の意を表します。

調査研究するにあたり安藤真理子氏（奈良国立博物館）、X線透過撮影は清水宏至氏（奈良大学大学院文学研究科文化財史料専攻博士後期課程１回生）、中岡呉葉氏（奈良大学大学院文学研究科文化財史料専攻博士前期課程２回生）のご協力とご助言がありましたので、ここに感謝の意を表します。

注

１）青木麻佑花2017「奈良大学博物館所蔵の仏教板木」『奈良大学大学院紀要 第23号』奈良大学大学院
２）宗政五十緒1982『近世京都出版文化の研究』同朋舎出版
３）真鍋俊照2001「仏教版画とその図像展開」『密教図像と儀軌の研究 下巻』法藏館
４）金子貴明2013『近世出版の板木研究』株式会社法藏館

参考文献

安藤真理子2016a「保存科学としての板木基礎的研究－大阪府立中ノ島図書館所蔵板木－」『奈良大学大学院研究年報 第21号』奈良大学大学院
安藤真理子2016b「板木の保存－文化財としての保存、職人の知恵・工夫・技の保存－」『立命館大学アート・リサーチ17号』立命館大学
岩本裕1988「戒牒」『日本仏教語辞典』平凡社
内田啓一2011『日本仏教版画史論考』株式会社法藏館
太田次男1999「高野版」『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店
大野達之助編1979「高野版」『日本仏教史辞典』東京堂出版
金子貴明2013『近世出版の板木研究』株式会社法藏館
（財）元興寺文化財研究所1999『豊山長谷寺拾遺 第二韓 版木』総本山長谷寺文化財等保存調査委員会
（財）元興寺文化財研究所2001『（財）大和文化財保存会援助事業による寶山寺の版木』
（財）元興寺文化財研究所2009『（財）大和文化財保存会援助事業による金剛寺の版木』
（財）元興寺文化財研究所2012『（財）大和文化財保存会援助事業による室生寺の版木』
永井一彰2013『奈良大学博物館企画展　板木さまざま－芭蕉・蕪村・秋成・一茶も勢ぞろい－』奈良大学博物館
永井一彰2014『板木は語る』笠間書院
藤井正雄2001「血脈」『新装版　仏教儀礼辞典』東京堂出版

真鍋俊照2001「仏教版画とその図像展開」『密教図像と儀軌の研究　下巻』法藏館
松長有慶・高木訷元・和田秀乗・田村隆照『法蔵選書　高野山　その歴史と文化』法藏館
密教辞典編集会編1984「誓水」『密教大辞典　縮刷版』法藏館
鷲尾順敬編1996「穆韶」『日本仏家人名辞書』
奈良大学博物館、奈良大学図書館、日本文化史源デジタル・アーカイブ研究拠点、立命館大学ARC「板木ポータルデータベース」 http://www.arc.ritsumei.ac.jp/database.html

Summary

「Kouya Buddhist Printing Small Blocks in the Nara University Museum」
－The Structure of the small block and Way of Reuse－

Press and business completed various development from print of a woodcut and development of culture, religion and the spread by a block. The printed book produced by a printing block, not oneself mainly was a subject of a study by a study in the past about a block.

This thesis addresses the issue through the study of Kouya buddhist printing blocks which are stored in the Nara University Museum. Specifically, the author has studied one group, the 13 stamp-type Kouya printing blocks, focusing on their structure, X-ray penetration photography and infrared image analysis,size and engraved characters.

They became possible to classify that into 3 from a processing scar about a nail in a small block and classify a re-procedure into 4.

Key words: Kouya buddhist printing blocks, Buddhist printing blocks, Nara University Museum